

ウェブ体験を共有する

－「ウェブ閲覧履歴共有ツール」の制作と利用－

高橋 智子 土橋 臣吾

ウェブには無限に多様な情報が存在する。だがそれは、私たちの多様な情報への接触を保証するわけではない。無限に多様な選択肢が与えられるなかで、私たちは逆に、自分のあらかじめの関心に合致する情報、あるいは自分にとって受け入れやすい情報だけを選択することもでき、そこではまさに自由な選択の結果として、接触する情報の画一化が生じうるからである。こうした認識を踏まえて、本研究では、＜個人の自由な選択＞を超えた情報への回路を、他人のウェブ閲覧履歴の参照というかたちで取り込むための情報ツール、すなわち「ウェブ閲覧履歴共有ツール」を制作し、その実験的な利用を試みた。制作されたツールはごくシンプルなプログラムによるものだが、その利用状況からは、そうした簡単なツールの挿入によっても、私たちのウェブのユーザとしてのあり方（ユーザ性＝usership）が変容しうることが示唆された。

キーワード：コミュニケーションの島宇宙化、ウェブ、閲覧履歴、RSS

1 はじめに

ウェブの世界には無限に多様な情報がある。私たちはその無限の多様性のなかから、自らの利益に合う情報を、その都度自由に選択する。しばしば「無いものが無い」と言われるウェブの世界は、いわば「究極に多チャンネル化した世界」であり、私たちはそこでほとんど無限の選択肢を獲得するのである。なるほどこれは大きな自由だろう。だが見方を変えれば、そこにはある種の不自由も指摘できるのではないだろうか。情報の洪水に溺れる…といったよくある話を繰り返したいわけではない。ここで考えたいのは、むしろより意識されにくい不自由、すなわち、無限の多様性のなかから自由に選択しているはずの私たち＝個々のウェブ利用者が、まさにそれゆえに、＜個人の選択＞というきわめて狭い閉域から出られなくなる、という不自由である。どういうことか。

ごく当然のことだが、重要なのは次の点である。つまり、ウェブが基本的にプル型（欲しい情報を自ら選択して引き出す）のメディアである以上、そこで私たちが接触する情報のバリエーションは、見かけ上どれだけ多様でも、原理的に、自らの関心や嗜好にそって選ばれたものに限定されざるをえない（注1）。もちろんこれは日常的にはむしろ快適なことだろう（望まないものに出会う

なくて済むのだから）。だが、無限の多様性と思われていたものが、実のところ、あらかじめの関心や嗜好の範囲でしか経験されえないのだとすれば、私たちはやはりそこにある種の相対的剥奪（注2）を指摘できる。極端な言い方をするなら、選択の自由を持つ私たちは、そうであるがゆえに、あらかじめ自分がそれに出会いたいことを知っている情報にしか出会えないのであり、だとすれば、私たちのウェブ体験とは実はきわめて予定調和的な経験に過ぎないかもしれないのである。

こうした一見些末な問題をあえて取り上げるのは、このようなウェブ体験のあり方が「コミュニケーションの島宇宙化」（宮台、1996）を帰結すると考えられるからである。ここで言う島宇宙化とは、人々が同じ関心や嗜好を共有する小さな共同体＝島宇宙に自閉し、異なる島宇宙間のコミュニケーションが困難になることを指すが、ウェブはそのメディアの形式上、こうした事態を加速するのである。実際、私たち自身よく知っているように、ウェブの世界では政治的信条から性的嗜好に至るまで、どんな人でも簡単かつ確実に自分の好みに合う居心地の良い場所（＝site）を見つけることができる。そして、ひとたびそれを見つけてしまえば、そこに自閉することはさらに容易だろう。もちろんこれは一概に否定されるべきことではない（注3）。だが、こうした事態のみが進展するなら、ウェブの利用に積極的な者ほど、結果的に偏った情報への回路（＝あらかじめの嗜好によって選択された特定の島宇宙）しか持たない新手的「情報弱者」と化す、という逆説さえありうる。選択の自由はその多様性を保証しないのである。

前置きはここまでにして。以下本稿で論じていくの

TAKAHASHI Satoko

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科 2005 年度卒業生

DOBASHI Shingo

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科講師

は、こうした社会的な問題意識を踏まえて企図された、ある簡単な情報ツールの制作と利用についてである。以下で、「ウェブ閲覧履歴共有ツール」と呼ぶそのツールは、その名の通り、複数の利用者のウェブ閲覧履歴を小規模な対人ネットワークのなかで互いに共有するためのツールである。これまでの議論から明らかなように、それは〈個人の選択〉を超えた〈他人の選択〉を、自分以外の人のウェブ閲覧履歴というかたちで自らのウェブ利用に組み込み、そうすることで、放っておけば容易に島宇宙化する自分自身のウェブ体験を、ささやかながらも再編することを目指している。見ていくように、その利用は現段階ではまだ実験的なものに留まるが、以下では、まず技術的な側面も含めてツールの制作過程について示し、その上で、その意義と可能性について再び社会的な視点から検討していこう。

2 ウェブ閲覧履歴共有ツールの制作と利用

2.1 基本コンセプト

周知のように、他人が見ているサイトを自分のウェブ閲覧に取り込むという試みは、たとえばソーシャル・ブックマークというかたちですでに広く行われている。それは、従来個人がローカルに蓄積するだけだったブックマークを公開・共有するものであり、そうした試みは〈個人の選択〉を超えた情報へのアクセスの契機として、

ひとまず有意義なものだろう。だが、誰のブックマークを参照し、またそこからどのサイトへアクセスするかは、当然ながらそれぞれの選択に任されるから、それも最終的には〈個人の選択〉に内属せざるをえない。実際、ソーシャル・ブックマークの一般的な使い方は、自分の関心を多方向に広げるためというより、むしろあらかじめの関心と重なる未知のサイトを効率良く見つけるというものだろう。その意味で、それは島宇宙化に抗うという本稿の問題関心に直接応じるものではない。やや雑な言い方になるが、本稿の問題関心にとっては、〈他人の選択〉が完全に〈個人の選択〉を超えたかたちで、つまりは、ソーシャル・ブックマーク的なそれよりも強引に押しつけられるような仕組みが必要なのである。

そのために、今回のツール制作では、まさにそうした「強引な押しつけ」を実現するものとして、RSS 配信（注4）によるプッシュ型のシステムの構築を試みた。その基本的な構成を示したのが図1である。図1にあるように、今回のツールで直接の共有の対象となるのは、専用に立ち上げられたプロキシサーバに残る、複数のユーザのウェブ閲覧履歴である。つまり、研究概要の説明を受け、了解の上でツールを利用する参加者は、まず日常のウェブ利用に際して、このプロキシサーバを経由することとする。すると、このプロキシサーバには全員のウェブ閲覧履歴が蓄積されることになる。そこで、その蓄積された情報のなかから URL 情報のみを切り出して RSS 形

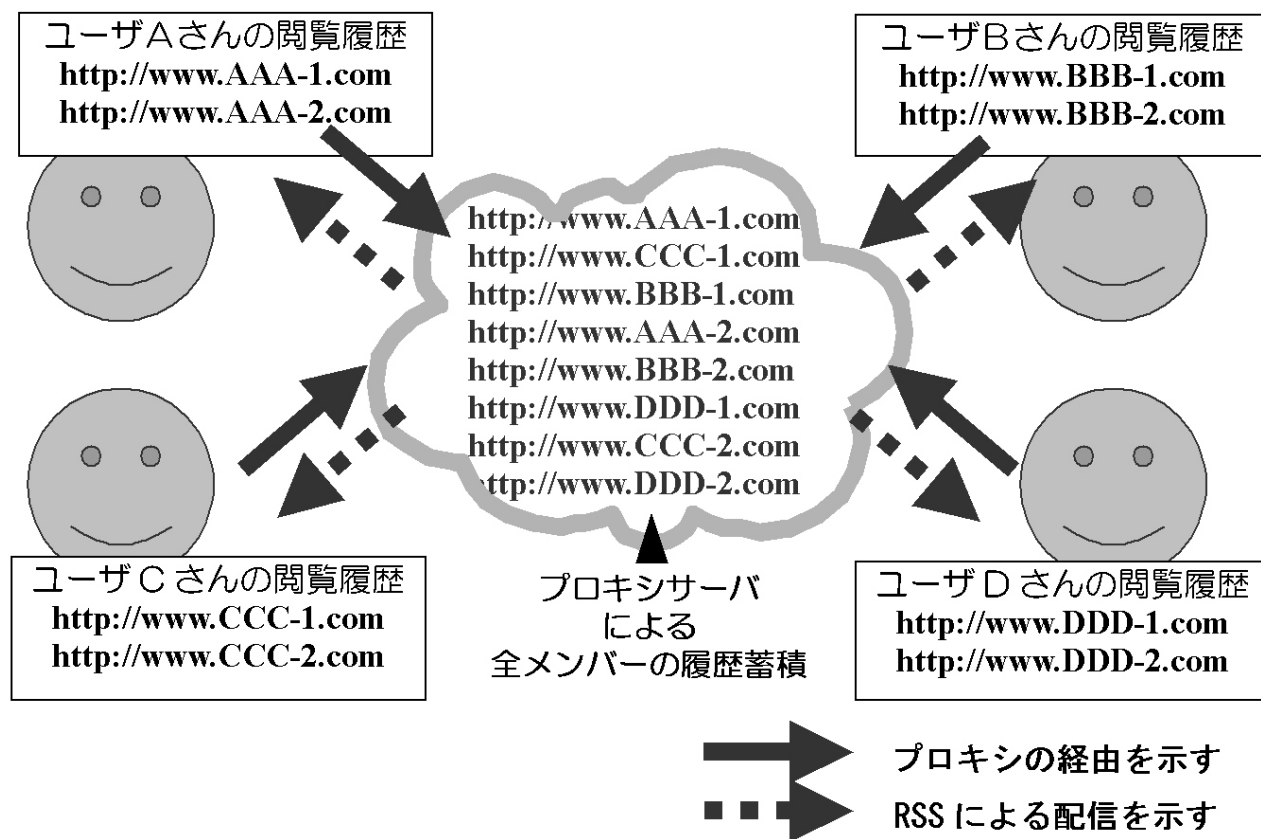


図1 ウェブ閲覧履歴共有ツールの概略

式で配信すれば、各参加者はほぼリアルタイムで他の参加者が閲覧しているサイトのURLを随時受け取ることができ、結果としてそこに、〈他人の選択〉の「強引な押しつけ」が実現するというわけだ(注5)。ごく簡単ではあるが、これが今回制作したツールの全体像である。

多くの人がおそらく感じるように、こうしたツールのあり方は、幾つかの意味できわめて「乱暴」なものだと言える。まずひとつには、各参加者のウェブ閲覧履歴が何らの分類も施されない情報として無差別に送られてくるという点である。普通に考えるなら、そうした情報の多くは——ソーシャル・ブックマークの有益さとは対照的に——たんなるノイズにしかならないだろう。また、実際の運用の際には、閲覧履歴を秘匿したいときにはプロキシへの接続を自由に切ってもらって構わないことを伝え、そのように対応してもらったものの、接続している限りは、自分のウェブ閲覧履歴が他人へ自動的に伝達されてしまうのだから、そこには一定の心理的な抵抗が当然残る。今回のツールは、これらの意味において「乱暴」なものであり、通常感覚からすれば、参加者のウェブ利用に「ノイズと不安」をいたずらにもたらすだけのものに見える。

しかしながら、いうまでもなくこうした「乱暴」さは、今回の実験的なツール制作と利用の核心をなしている。つまり、まず無差別に送られてくるノイズという点について言うなら、それはそうであるがゆえに、〈個人の選択〉を完全に超えた何か、すなわち島宇宙の外部への回路をそれぞれの参加者に送り届けることができる。こうした仕組みを持つ今回のツールの下で、参加者は自らの関心や嗜好とは異なる情報に、いわば不可避に「出会ってしまう」状況に置かれるのである。また、通常は秘匿されている自分のウェブ閲覧履歴が(合意の下にはあれ)公開されるということについて言うなら、それは、普段は完全にプライベートなものとして行われているウェブ閲覧という行為を、むしろパブリックな行為として経験する機会を提供し、そうすることで、ウェブというメディアへの別の構えを利用者自身が発見していく契機になりうる。

端的に言うなら、今回のツールが目指したのは、このような効果によって、ウェブを利用するという経験のあり方それ自体を組み替えること、あるいは、ウェブというメディアを異化することだった。実際、今回このツールのもっとも積極的な利用者であった筆者ら自身の経験からも、こうした異化効果は実感的に確認されたと言える。もちろん、ここで見てきた「乱暴」さは、たとえばこのツールを一般の利用へ供していこうとするときには大きな障害になる。だがそうした次元とは別のところで、その「乱暴」な基本コンセプトにはやはり一定の意義を認められるし、その「乱暴」さに巻き込まれた経験から

はウェブのあり方について重要な示唆を得ることができるのである。だが、議論を性急に拡大する前に、以下ではまず、こうしたコンセプトの下で企図されたウェブ閲覧履歴共有ツールがどのように制作されたかをやや詳しく見ておきたい。

2.2 ツール制作のプロセス

あらかじめ確認しておくなら、今回のツールは類似事例の少ないものであったこともあり、その制作にあたって初めから最終的な完成形を明確にイメージできていたわけではなかった。それゆえ、実際の制作にあたっては、

(1) ツールを想定した実験、(2) 試作版の制作、(3) 改良版の制作といった幾つかの段階を踏むことになった。また、ウェブ体験の再編という今回のツールの目的からして、ユーザ不在の状態はまったく無意味であるため、ごく自然の流れとして、(1)の段階からすでに、筆者の友人関係や研究室所属学生に協力を依頼し、実際に使ってもらいながら、徐々に制作を進めることになった。その際、随時協力者にヒヤリングを行い、一定程度それに基づきながら制作していったため、強く意識していたわけではないが、今回のツールは結果としてある種のユーザ参加型デザインによって制作されたとも言える。順を追って確認していこう。

(1) ツールを想定した実験

まずツール制作に先立って行ったのは、ウェブ閲覧履歴の共有という経験が具体的にどのように感受されるのかを検証する簡単な実験である。この段階では、具体的なツールの制作はせず、ごく単純に、既存のチャットを利用して実験を行った。つまり、数名の参加者が自らの閲覧したウェブサイトのURLをコピーし、チャット画面に随時ペーストしていくことで、参加者のウェブ閲覧履歴がチャット画面に時系列順に並ぶようにしたのである(発言者の名前は伏せて行った)。本来制作したかったものは、このコピー&ペーストの作業を省いて、自動的に閲覧履歴が送られてくるものだったが、この段階では、友人間での閲覧履歴の共有という出来事をまず具体的に経験するために、既存のチャットをとりあえず利用したわけである。なお、多少なりとも、コピー&ペーストをスムーズに行うために、各参加者には「RakuCopy」(<http://a-h.parfe.jp/rakucopy/rakucopy.html>)というフリーソフトを使用してもらった。このソフトはブラウザ上で右クリックをするだけで、当該のページURLをコピーできるというものである。

結論から言えば、この実験で確認されたのは次のようなことだった。つまり、閲覧履歴の共有はきわめて興味深い経験として感受されるものの、それ自体に焦点が当たってしまうなら、ウェブ体験そのものの再編という

今回の研究目的はおそらく果たせない。というのも、確かに今回の参加者は、自分が知っている面白いサイトを紹介しあうといった部分でこの実験を大いに楽しんでいった。だが、それはごく一時的な「祭り」の状態であり、しばらくの間は白熱するもののその熱は容易に冷めてしまう。要するに、参加者たちのふるまいは、それぞれの「ネタ」を一気に紹介するというかたちで収斂したのである。だとすれば、それはそれ自体として面白い遊びだとしてもやはり一過性のものに過ぎず、参加者のウェブ体験を継続的に再編するものにはなり得ない。「祭り」である限り、「祭りの後」には、それぞれが普段のウェブ利用のかたちへ戻っていくのである。

容易に推察されるように、この実験がこうした結果になったのは、ひとつには閲覧履歴の公開が、「手で URL をコピー&ペーストする」という能動的な作業を介して行われたためだろう。こうした一連の作業は、手間がかかるというだけでなく、閲覧履歴の公開というふるまいを、流れのなかで自然になされるものではなく、それ自体が強く意識される中心的な活動にしてしまう。だとすれば、そうした行為が日常のウェブ利用に組み込まれるとは考えられないし、そのように意識的に提供される「ネタ」としての〈他人の選択〉は、今回目指している「無差別であるがゆえに偶発的に出会ってしまう異質な情報」とはかなり性格が異なる。こうしたことから、以降のツールの制作においては、公開と共有をやはりできる限り自動化し、より目立たない仕方で、しかし継続的に参加者のウェブ閲覧に寄り添うようなかたちを目指す必要があることが理解された。

(2) 試作版の制作

こうした要求に応えるために採用されたのが、すでに述べたプロキシサーバへの閲覧履歴の蓄積と RSS による自動配信という仕組みである。この仕組みであれば、利用開始にあたって、プロキシサーバの接続設定と RSS リーダのインストールを行う必要があるものの、それ以降は何の操作もなしに、自らのウェブ閲覧履歴の公開と、他の利用者のウェブ閲覧履歴の配信を受けることができる。こうしたシステムの構成をより具体的に示したのが、図2である。

図2からも分かるように、今回のツールを実現するにあたって必要な作業は、それぞれのサーバの構築および WEB サーバ上で稼働する PHP プログラムの作成だけである。それぞれ若干の説明を加えておこう。まず、サーバの構築については、WEB サーバとプロキシサーバをそれぞれ apache と squid で構築した。この際、セキュリティの観点から、アクセスログを解析・表示する PHP プログラム (KEHAIKUN.php) にはプロキシ経由のみでアクセスできるように apache で設定し、プロキシを通さない第三

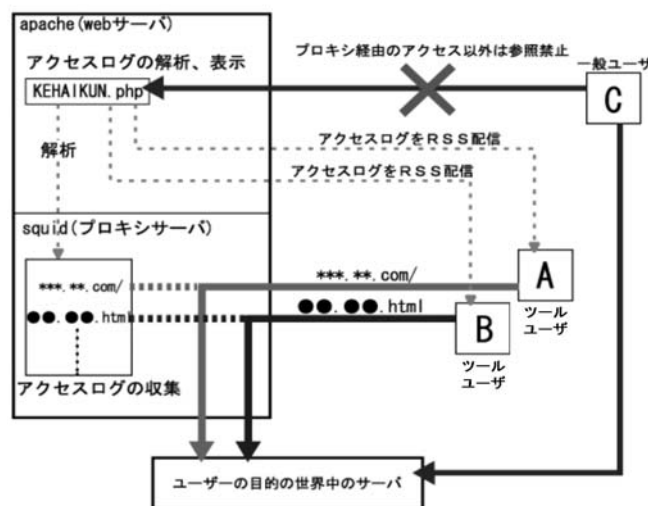


図2 ツールのシステム構成図

者による閲覧履歴の参照は不可能にしてある。また同時に、プロキシ経由でローカル IP にアクセスできないように squid で設定してある。また、運用に際しては、プロキシサーバへの接続の際にユーザ認証をかけ、参加者は指定の ID と各自に発行されるパスワードを用いてツールを利用することとした。PHP プログラム (KEHAIKUN.php) は、ごくシンプルなものであり、squid ログを解析して、日時と URL を取り出し RDF 形式に変換するプログラムである。その際、幾つかの広告サイトなど、閲覧履歴として不要なものについては、あらかじめ除外するように設定した。

ユーザの側で行うプロキシの接続設定、RSS リーダのインストールについては、あらかじめ説明用の文書を配布し、その手順で行えば問題なく利用できるようにした。今回は参加者のコンピュータ・リテラシーをあてにできたため支障はなかったが、今後もし一般の利用へ供することを考えるなら、ツールを専用のアプリケーションとして構成するなどの対応が必要となる。ただし、今回の研究においては、そこまでの展開は当初から念頭になく、あくまで身近な人たちとの実験的な利用のみを想定していたため、洗練度は低いが、参加者自身に最初の設定をしてもらうかたちをとった。また、プライバシーへの不安を払拭してもらうには、ツールの仕組み（指定のプロキシサーバを通さない限り閲覧履歴が蓄積・公開されることがあり得ないこと）を理解してもらう必要がある。そうした実際的な理由からも、今回は身近な人たちとの実験的な利用に留まらざるを得なかった。

ユーザがローカルで用いる RSS リーダについては、既存のフリーウェアのなかから簡便なものを探し、Darksky (<http://darksky.biz/>) が提供する「RSS バー」を参加者に推奨した。この「RSS バー」はブラウザ組み込み型のもので、ウェブ閲覧時にはもっとも見やすい形態であると考えられる。図3は、この「RSS バー」を用いた状

態での、ウェブ閲覧履歴共有ツールの利用画面である。



図3 「RSSバー」を用いたツール利用画面

(3) 改良版の制作とRSSリーダの選択

上記(2)の試作版を5人の協力者に利用してもらった結果、幾つかの具体的な要望が出てきた。まずひとつには、閲覧履歴の表示をURLではなく、ページタイトルで行って欲しいというものである。これはたとえば、URL表示のみだとリンク先の手がかりがあまりに少なくクリックする気が起きにくい、あるいは、期待してクリックをしてみてもただのフレームページに行き当たってがっかりした経験がある、などとコメントしてくれた参加者らから出た要望であり、まずはこの要望への対応を試みた。

具体的には、従来のKEHAIKUN.phpで全ての処理を行うという方式を改めた。つまり、KEHAIKUN.phpから、①squidのアクセスログを解析し日時とURLを取得する関数(log2array.php)と、②取得したURLからタイトルを割り出す関数(uri2title.php)を読み込み(注6)、最終的にKEHAIKUN.phpで、取り出された日時、タイトルをRDF形式に変換して表示するアルゴリズムに変更したのである。だが、結果的には、こうした変更は十分に機能しなかった。タイトル表示の処理がうまくできるサイトとできないサイトが混在し、閲覧履歴の表示がきわめて不安定になるためである。そのため、数日間の試行の後、表示はURL表示に戻さざるを得なかった。また、こうしたなかで、閲覧履歴の表示をURLでもページタイトルでもなく、リンクサムネイル(リンク先のページのサムネイル画像の表示)で行ったらどうか、というアイデアも出たが、こうした表示形式の問題については、タイトル表示の実現も含めて、今なお課題として残されている。

また、これとは別の要望として、ウェブブラウザを起動していないときにも、ツールを利用したいという要望があった。これは、当初ウェブ閲覧中のツール利用をもっぱら想定していた筆者にとって、ある種、虚を突かれる要望であった。しかし、日常のパソコンの利用状況を思い起こせば理解できるように、インターネットへの常

時接続さえなされていれば、何をしているときであっても、その傍らで常に起動しているRSSリーダに随時他の参加者のウェブ閲覧履歴が送られてきて何ら問題はない。というより、日々のウェブ体験そのものの継続的な再編という今回の研究目的を考えるなら、ウェブ閲覧時のみならず、日常のパソコン利用の総体のなかに今回のツールを組み込むそうしたかたちの方が、むしろこちらの意図に近いものになるとも言える。

そこで、従来推奨していたブラウザ組み込み型のRSSリーダに加えて、デスクトップに常駐するティッカー型のRSSリーダを探すことにした。様々なものがあるし、最終的には個々のユーザーに好きなものを選んでもらえば良いのだが、今回は、フリープログラマの赤塚大典氏による「ながらみニュース」(<http://www.wicoco.org/nagarami/hiki.cgi#11>)を推奨した(注7)。これは、常にウィンドウの最前面にログを表示させるタイプのRSSリーダで、新しい更新があるとログが流れるような美しいアニメーションで動く。また、ログの表示件数や位置、透明度などを自由に変えることができるため、デスクトップ上で邪魔になりにくい。こうした幾つかの点で、ユーザーの継続的なツール利用を促進する効果があると考え、このリーダを推奨することにした。図4は、この「ながらみニュース」を用いた状態でのツールの利用画面である。

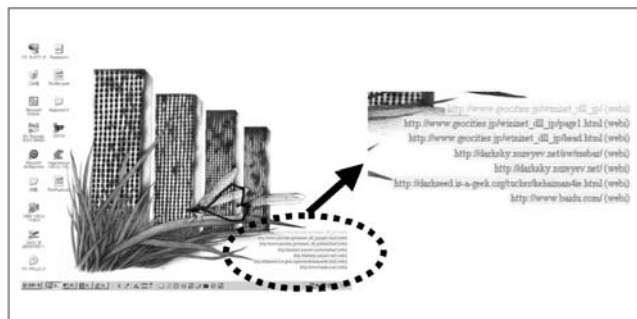


図4 「ながらみニュース」を用いたツール利用画面

2.3 利用の概況

以上がツール制作過程の概要だが、本章の最後に、その利用の概況について示しておこう。すでに述べたように、今回のツール利用はあくまで実験的なものに留まったが、結果的に、上記(2)の完成段階から3~4ヶ月程度のあいだ、筆者二名に加え、常時数名ほどの参加者の協力を得て利用実験を行うことができた。今回の参加者はいずれも筆者(高橋)の友人関係や研究室所属学生で占められていたから、そのほぼ全員が互いに現実の知り合いである状態で行われた。参加者は、筆者(土橋)を除いて、全員が20代前半の男女である。利用に際しては、研究の概要と目的を伝え、了解の上で参加してもら

ったが、閲覧履歴を秘匿したい場合にはプロキシサーバの接続を切ってもらえば良いことについては特に繰り返し確認し、不本意な履歴公開がないように配慮した。

利用実験の結果としてまず確認しておくべきは、3～4ヶ月という利用期間の長さがこちらで設定したのではなく、その程度の期間で参加者の利用が漸次なくなっていった結果であった、ということである。この点をどう評価すべきかについては微妙な部分が残る、というのも、最初の協力依頼以外には、継続利用の要請は特になかったから、にもかかわらず、ツールが一定期間利用された事実は、ある程度評価できる。だが、端的に言って、やはりこのツール自体が次第に飽きられてしまった側面も多分にあり、継続的に利用者のウェブ体験を再編していくという目的が完全に果たされたとは言いがたい。もちろん、2. 2の(1)で述べたような「祭り」的一過性は乗り越えることができたし、〈他人の選択〉を取り入れることの面白さをヒヤリングで語ってくれる参加者も多かった。しかしながら、そうであったとしても、今回のツールが利用者のウェブ利用の日常的なルーチンに完全に組み込まれることはなかったのである。

これには幾つもの理由が考えられるが、ヒヤリングのなかでしばしば語られたのは、このツールの「反応のなさ」である。つまり、このツールは、言ってしまうと、RSSリーダに淡々とURLを表示させるだけのものだから、まずひとつには、自分が公開したURLを他人が見てくれたかどうかを知る術がない。また、利用のタイミングによっては、自分の閲覧履歴ばかりになってしまうこともしばしばあり、そうした状況に物足りなさを感じる参加者もいた。しかも、このツールはその特性上、それを使わないからといって何か支障があるわけではないし、使った場合にも、実利的なメリットが得られるものでもない。だとすれば、他の参加者の反応こそが、利用の動機付けとして有望なものだったのだが、今回のツールにはそれが欠けていたわけである。

したがって、今後の展開を考えるなら、まずひとつには、「反応」を可視化する仕掛けが改善の方向性としてありうるし、また、このツールを単独ではなく、たとえばメッセージングのようなコミュニケーション・ツールの一機能として組み込むという方法も有望かもしれない。実際、利用者のなかには、自分のブラウザにhttp://konbanwa!!!などと入力することでそれを配信し、RSSリーダ上で簡単な会話を試みる者もいたが、こうしたことにも、何かしらの「反応」や「コミュニケーション」への欲求を見て取ることができる。いずれにせよ、〈他人の選択〉の「押しつけ」には今回の仕組みで十分であるものの、現状ではそれを利用者に継続的に受け入れてもらうための動機付けが欠けており、その点の改善が、今後まず取り組まねばならない課題として残された

と言える。

しかしながら、こうした問題があったにせよ、今回のツールがとりあえず数ヶ月間実際に利用されたことは事実であり、その経験からは、ウェブ体験の再編という目的への、少なくとも糸口はつかめたように思われる。以下では、主にそうしたこのツールのポジティブな可能性について、利用実験の過程で随時行っていたヒヤリングの結果を参照しながら考察し、今回のツール制作と利用の意義を抽出しておこう。

3 ウェブ体験の共有、その可能性

繰り返し述べてきたように、今回のツールの目的は、〈他人の選択〉の「押しつけ」によって、〈個人の選択〉という島宇宙に自閉しがちなウェブ体験を再編することだった。したがって、こうした狙いが直裁に実現したと言えるのは、当然ながら、ツールに表示される〈他人の選択〉を参加者がフォローし、〈個人の選択〉では決して出会わなかつたであろう情報に辿り着いたときである。実際、こうしたことは今回のツール利用のなかで日常的に生じていたし、多くの利用者には、そのことをポジティブに受け止めてもらえた。ヒヤリングのなかで得られた典型的な反応を挙げるなら、たとえば次のようなものである。

私がツールを使わせてもらって感じたことは何といっても「気になる」です。アドレスから想像して、旅行のサイトだな、とか分かる場合なんかは、誰が何処に行くんだろう?とか。で、逆に全然想像がつかないアドレスだと、何のサイトだ?と思って辿りたくなってしまいますね。(…)(ツールに)繋いでいるときは、自分がよく見ているサイトを見たりするのはなくて、他の人が行ったサイトを追いかけるのが中心です。(括弧内は筆者による補足。以下同様) (T.S. 女性20代)

もちろん、すべての参加者からこの利用者が語ってくれたような肯定的な評価を得られたわけではない。実状としては、むしろ以下で見るような不満や物足りなさが語られることもしばしばであった。だが、逆に言えば、次のような不満が表明されるのは、一方で〈他人の選択〉に触れることへの期待感があるからこそであり、その点で、次のような発言もまた、今回のツールの可能性を(あくまでコンセプトレベルでの、という但し書きつきでだが)裏付けてくれるものだと言える。

そういう時(検索で面白いページに行き当たれず、時間の無駄になるときに)他人を通してネットに接

すれば、自分の知らないページを巡回できて、ネット生活が広がるかも知れないと思って、ツールを使用してみた。みんなが日参してるようなページならやっぱり結構楽しめるかもしれないなあ、と。だから最初は、そのつもりでツールを覗いていて自分のログばかりだったり、あってもログ数が少なかったりして物足りなさを感じた。(Y.S. 20代男性)

このように、＜他人の選択＞に接することの意味や面白さは、まずはこうした直接的な次元で感じて／期待してもらえたとと言える。ここまでは、ツールの企画段階から明確に意図していたことであり、予測の範囲内であった。これに対して、もうひとつやや異なる次元で興味深かったのは次のようなプロセスである。つまり、参加者たちは、たんにウェブ閲覧中に＜他人の選択＞に出会うだけではない。彼ら彼女らは、ツールを通じて＜他人の選択＞に継続的に触れていくから、参加者の間には必然的に、互いに同じサイトを見ているという共通体験が蓄積されていく。その結果、そうした共通体験をベースにした参加者間のコミュニケーションが日常生活のなかで新たに生じていくのである。これは今回のツールの効果としては間接的なものだが、それだけに、より広がりをもつものになりうる可能性を秘めている。たとえば、次のような事例が分かりやすいだろう。

あと、多くの人はテレビの事を話題にしますよね。でも、ウェブはテレビ番組とは比べものにならないくらいページが溢れているから、見ているサイトがダブらないとか、いろいろあって、見たページの事を話題に出したりしない場合が多いと思うんです。でも、このツールがあると、追ったりして見るページがダブって、誰だろうね？っていうところから、サイトの話題になったりして、その人の向いている興味の発見にも至ったりとか、より日常にウェブが入ってくるなど感じます。(T.S. 女性20代)

今は自分の履歴をかなり垂れ流している。たまに恥ずかしくなるけど。あとツール出ただけで皆の流れが分かるっていうのもいいと思う。とりあえず友達同士で何かを共有するというのは大賛成。TVだろうとネットだろうと「あれ見た？」っていうのはそれを見ていない人には成立しないわけで…(Y.S. 20代男性)

実のところ、二つ目の発言者Y.S.は、こうした目的のためには2. 2の(1)で触れたチャット形式の方が適していると感じており、今回のツールを高く評価しているわけでは必ずしもない。だが、一つ目のT.S.の発言も

あわせて見るなら、今回のツールが、「そのサイトを互いに見ていることを知っているがゆえに成立するコミュニケーション」(あれ見た?的コミュニケーション)を現実にも喚起していることが分かる。これはごく当然のことにも思えるが、きわめて重要な意味を持つ。というのも、T.S.が言うように、無数の選択肢があるウェブでは、そうであるがゆえに、たとえばテレビであれば自明のこととしてなされていたメディアの共通体験が生じにくい。だとすれば、その当然の帰結として、現実の対人関係(家族、友人、同僚など)のなかで、個々のウェブ体験に関するコミュニケーションがなされる機会も限られたものになるだろう。そして、こうした個人のウェブ体験の現実世界での広がりにくさもまた、コミュニケーションの島宇宙化を加速する。個人のウェブ体験はまさに個人的な経験として死蔵されてしまうのである。

マス・コミュニケーション研究の蓄積に明るい向きであれば、こうした議論から、ある古典的な研究を想起するだろう。すなわち、カツとラザルスフェルドによる「コミュニケーションの二段の流れ仮説」である(Katz & Lazarsfeld, 1955)。周知のように、この「二段の流れ仮説」は、マスコミの影響や効果が(それまで一般に信じられていたように)孤立した個人に直接ふりかかるものではなく、むしろ、その個人が所属する小集団やその中のオピニオン・リーダーの存在を媒介にして段階的に受容されるものであることを示したのだった。誤解を恐れずに単純化するなら、こうした議論は、それぞれの個人を取り囲む小集団や対人ネットワークが、メディアの巨大な影響力に対する緩衝帯になるという含意を含んでいる。だとすれば、今回のツールは、そのメディアとしての形式の特性上、必然的に個人化せざるを得なかったウェブ体験に、ある種の「二段の流れ」をもたらし、ウェブの情報を集散的に吟味する機会を提供する可能性があると言える。

もちろん、今回確認された「あれ見た?」的なコミュニケーションは、そのもっとも素朴な形態に過ぎない。しかしながら、そうしたコミュニケーションが、T.S.が語る「より日常にウェブが入ってくる」といった感覚、すなわち、現実の対人関係にウェブというメディアが埋め込まれていくという感覚をもたらすなら、その意義は決して小さくないだろう。一概には言えないが、現実の対人関係のなかに流通する言説や意味や価値は、ウェブ上で個人が見つけてくる＜自分にぴったりの居心地の良い情報の集積＞よりも質的に多様なものでありうる。だとすれば、こうした現実の対人関係のなかへのウェブ体験の埋め込みは、ともすれば島宇宙化しがちな自分自身の情報接触を相対化する機会になりうるし、ウェブと自らの関係を組み替えていくひとつの具体的な契機になるだろう。その意味で、今回見られた「二段の流れ」的な

効果は、萌芽的なものではあれ、今回制作したツールの今後を考える上で、重要な示唆を与えているように思われる。

実際、こうした議論と密接に関わるところで、今回のツール利用者の何人かは、ツールの利用を契機にウェブ利用者としての自分のあり方の変容を経験している。特に重要だと思われるのは、今回のツールによって、通常ほぼ完全に私的な行為としてなされているウェブ閲覧が、他者の存在を意識したセミパブリックなものになるという変容である。まずはそれが必ずしもポジティブな経験としては受け止められなかったケースから見ておこう。

(このツールを使うと) ウェブって一人でやるものなのに公共性もある。だけど、消費は一人で結局行うものなので、それが意味で履歴の共有で公共の場で消費するようになってしまう。だから、なんだかいつも見れるサイトも見れなくなったりするんですよ。(S. K. 20代男性)

いうまでもなく、このツールに接続したままでは、見ていることを他人に秘匿したいサイトは見ることができないし、それは当然ながら、ある種の拘束感をもたらす。語られているように、それは、それまでもっぱらプライベートなものとしてなされてきたウェブ閲覧がある種のパブリックなふるまいになるからである。そして、今回のツールがそうした傾向を過剰に増幅してしまうとすれば、おそらくその息苦しさは、上で引いた参加者が語るようなネガティブな経験しかもたらさないだろうし、そうしたツールを受け入れてくれる人はほとんどいないだろう。だが、次の参加者が語るような、もう少しニュートラルな反応からは、このツールのそれとは別の可能性を引き出すことができるように思われる。

とにかくこのツールを使用しながらインターネットをする際は、人に自分の履歴を見られることを多少意識してウェブサイトを巡回することがあった。ウェブを閲覧する際に別の「モード」ができた。しばらく使っていると見られることを忘れてどんどんいつものウェブ閲覧になってるけど。(N. Y. 20代男性)

特に注目しておきたいのは、この参加者が語る「別のモード」という言葉、あるいはそうした理解のなかで、彼がセミパブリックな状況でのウェブ利用を受け入れているという事実である。つまり、ここでの議論に引き付けて敷衍するなら、まず、今回のツールは——筆者らもそれを目指したわけではないが——利用者のウェブ体験のあり方を一挙に、そして全面的に書き換えるものではない。だが、この発言から理解されるように、そ

うであったとしても、今回のツールには、従来のウェブ利用のあり方に「別のモード」を付け加え、人がウェブのユーザとして存在するとき、そのあり方(ユーザ性＝usership)を複数化するという可能性を認めることができる。実際、メディアを私的に消費するということが、さらには、私たちがウェブ上に島宇宙を求めてしまうということは、メディアの重要な機能のひとつが気休めや気晴らしであることを考えれば、一刀両断に切り捨てられるものではない。だが、冒頭で確認したように、ウェブの利用がそれだけになるなら、結果としてそれは、私たちが新手の「情報弱者」にしかねない。ユーザ性の複数化という道筋は、こうした矛盾に対するひとつの有効な解になりうるものであり、今回のツールの現実的な可能性は、おそらくそのあたりにあるだろう。

いずれにせよ、ウェブが未だ相対的に新しいメディアであること、そしてそのユーザのあり方も未だ完全に固定化せずにあることを考えれば、それがどのようなものであれ、今後も様々な試みが重ねられて良いはずである。ラジオの草創期の歴史を論じた山口が言うように、新しいメディアとそのユーザが一定の様態を整えて社会に定着するまでには、様々な紆余曲折を含む「長い誕生日」が存在する(山口, 2003)。メディアもユーザもあらかじめその運命を予告されたかたちで、いきなり社会に産み落とされるわけではないのである。だとすれば、今回の試みは、きわめて微細なものではあれ、そうした「長い誕生日」の最中で、私たちがウェブというメディアのどのようなユーザとして生まれようとするのか、その「生まれ方のデザイン」という大きな課題に関わっていたのだとも言える。本研究が取り組んだのはそのごく一部に過ぎず、今後、本研究の深化のみならず、同様の課題への別の切り口からの取り組みも考えていけるだろう。

注

注1 もちろん最近のインターネットにはプッシュ型の情報サービスも様々な展開を見せているし、それらは個人の意図を超えたところで、情報を(勝手に)送り届けてくれる。だが、そうしたサービスの多くが、事前に登録された個人の関心や嗜好に基づいたフィルタリング的な機能を果たすものである以上、事態に違いはないとも言える。

注2 社会学者R. K. マートンの概念。人が感じる不満や不自由は、その人が置かれた客観的な状況のあり方に起因するというより、むしろその人が抱く期待水準と現実とのギャップに起因すると考えられるが、そのとき、そのギャップが相対的剥奪と呼ばれる。ここではウェブの情報を<個人の選択>としてのみ利用する私たちが、その外部により多

様な情報があることを意識したとき、そこに相対的剥奪を感じるということである。

注3 ウェブの大きな貢献のひとつは、現実の日常生活で孤立せざるを得なかった文化的マイノリティが容易に「仲間」を見つけられるようになったことにあるからである。

注4 RDF Site Summary の略。主にブログやニュースサイトの更新情報を配信するために使われているプッシュ型の仕組みであり、ユーザがローカルにRSSリーダーと呼ばれる受信ソフトを準備することで、そうした各種サイトからの最新情報を自動的に受け取ることができる。

注5 今回のツール制作に際しては、URL情報の共有と同時に、自分以外の誰かが現在ウェブ上に居るという「気配」の共有も目的としていたため、RSSによる配信の自動化はその点でも目的に合うものだった。本論文では、この「気配」の共有という観点については詳細に論じることはしないが、その点について主眼を置いた検討としては、筆者(高橋)の学部卒業論文(高橋 2006)を参照。また、この学部卒業論文については、その概要を以下で閲覧することができる。

http://opinfo.lib.musashi-tech.ac.jp/grad_pdf/0232142.pdf

注6 取得したURL先のソースコードを1500byteまで読み込み、その中にタイトルタグ(<title></title>)があれば、タグに囲まれた文字列を抜き出しその値を返す。タイトルタグが存在しない場合、あるいは読み出しに失敗した場合はfalseを返し、タイトルの代わりにURLを表示するようにする。

注7 「ながらみニュース」は本来シェアウェア、あるいはブログウェア(利用者が自分のブログで紹介してくれれば、フリーで提供)として提供されるものだが、研究の目的を作者の赤塚大典氏に伝えたところ、特別にフリーでライセンスを提供していただいた。この場を借りて、赤塚氏に感謝したい。

内郁郎他訳『パーソナル・インフルエンス——オピニオン・リーダーと人びとの意思決定』培風館

[3]宮台真司, 1996, 『制服少女たちの選択』講談社。

[4]高橋智子, 2006, 『ウェブ体験を共有する——「気配ツール」の開発と実装』平成17年度武蔵工業大学環境情報学部卒業論文。

[5]山口誠, 2003, 『「聴く習慣」, その条件——街頭ラジオとオーディエンスのふるまい』『マス・コミュニケーション研究』63号。

参考文献

[1]土橋臣吾, 2006, 「インターネットを使い倒す——集合体としてのユーザとヘビーユースというふるまい」上野直樹・土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーク——ハイブリッドのデザイン』せりか書房。

[2]Katz, E. & Lazarsfeld, P.E., 1955, Personal Influence: the part played by people in the flow of mass communication, Free Press. (=1965, 竹